



重い砂

ТЯЖЕЛЫЙ ПЕСОК

ほのお
炎の愛に生きた我が母へ

アナトリー・ルイバコフ

著・北畑静子・長島七穂 訳

訳者／北畑静子（きたはた しずこ）
福島県生まれ、プーシキンロシア
語大学でロシア語修得。国立国会
図書館勤務の後、現在ソビエト文
学の紹介、翻訳に専念している。

訳者／長島七穂（ながしま ななほ）
東京生まれ。上智大学社会学部卒
業。国立国会図書館勤務中に、約
一年間モスクワ大学へ留学。現在
はモスクワ在住。

重い砂——^{うね}炎の^{あい}愛に^わ生きた我が母へ

著 者 アナトーリー＝ルィバコフ
訳 者 北畑静子・長島七穂
発 行 1987年12月 初版1刷
発行者 今村 廣
発 行 所 偕成社 〒162 東京都新宿区市ヶ谷砂土原町3-5
電話 (03)260-3221(販売他)・260-3229(編集部)
振替 東京5-1352番
印刷・製本 中央精版印刷株式会社

NDC983 526p 20cm ISBN4-03-018010-8

Published by KAISEI-SHA, Ichigaya Tokyo 162 Printed in Japan.
©S. KITAHATA, N. NAGASHIMA, 1987. 落丁・乱丁本はおとりかえします。

偕成社は、平日も休日も24時間、電話でもFAXでも本のご注文をお受けして
います。どうぞご利用ください。電話 03-260-3221(代) FAX 03-267-0124

重い砂

ほのお あい わ
炎の愛に生きた我が母へ



リュバコフ 著 北畑静子・長島七穂 訳

ТЯЖЕЛЫЙ ПЕСОК

by Анатолий Рыбаков 1979

© Советский писатель, Москва

Japanese translation copyright © KAISEI-SHA Co., Ltd. 1987

by arrangement with the Copyright Agency of the USSR (VAAP), Moscow
and through Japan-Soviet Copyright Center, Tokyo

装画 喜多 迅鷹
装丁 工藤 強勝

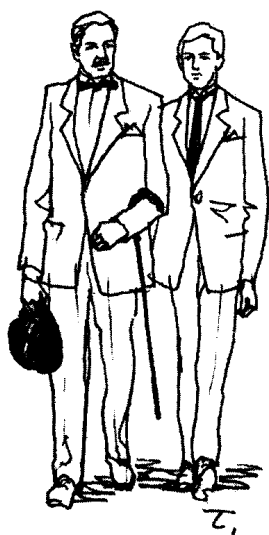
こうして、ヤコブは七年のあいだラケルのために働いたが、彼女を愛していたので、わずか数日のように思われた。

《創世記 第二十九章二〇節》

イワノーフスキイ家をめぐる人々

ボリス（愛称ボーリャ）……イワノーフスキイ家の次男，物語の語り手
ラヒリ＝ラフレンコ …………… ボリスの母
ヤコヴ＝イワノーフスキイ …………… ボリスの父，スイス生まれ
リョーワ 妻アンナ＝モイセーエワ …………… 長男夫婦
エフィム 妻ナターリャ …………… 三男夫婦
リューバ 夫ボロージャ …………… 長女夫婦
ゲンリフ …………… 四男
ディーナ …………… 次女
サーシャ …………… 五男
アブラム＝ラフレンコ 妻ベルタ …………… 母方の祖父母
ヨシフ ラザリ グリーシャ ミーシャ …………… 母の兄弟
ガリーナ＝トカリョーワ（愛称ガーリャ）…………… ボリスの妻
ソーニャ＝ビシニェーフスカヤ …………… ボリスの昔の恋人，女優
アンナ＝エゴロブナ …………… リョーワの家の家政婦
ハイム＝ヤグージン …………… 父方の遠縁の老人。退役下士官
イワン＝カールロビチ夫妻 …………… 隣人のドイツ人夫婦
スタショーノク家 …………… 隣人の白ロシア人一家
オレーシャ …………… スタショーノク家の末娘
シードロフ …………… 製靴工場長，父の上役
ガイク …………… アルメニア人の画家

第一部



わたしの父になにかこれといった特別なところがあつただろうか。べつにありはしなかった。もつとも父はスイスのバーゼル生まれだった。わが町にスイス生まれの人間がそうたくさんいたわけではない。いや正確に言えば、それは父だけだった。

その点をのぞけば、たいした腕もないありきたりの靴職人だった。父の父、つまりわたしの祖父はバーゼルの医学教授で、兄たち、つまりわたしの伯父たちは医学博士であった。父も医学博士になるはずだった。それなのに父は靴職人に、それもすでにのべたようなあまりぱっとしない靴職人になったのだ。

わたしの姓はイワノフスキー。父もイワノフスキー、バーゼルの祖父も伯父たちもイワノフスキー、それに現在バーゼルに住む従兄弟たちも、イワノフスキーだ。もつともバーゼルではイワノフスキーではなく、ドイツ風にイワノフスキーなどと改められているのかもしれない。が、どっちみちイワノフスキーであることには変わりあるまい。わたしの曾祖父は、イワノフカ村生まれ

だった。出身地の都市や町や村の名をとって姓にするというのが、そのころのならわしだったのだ。

曾祖父は裕福だったので、ひとり息子の祖父が高等中学校を卒業すると、スイスに留学させた。祖父はバーゼルで大学を終え、同じバーゼルで結婚した。その相手は、大病院を経営していた医者（むすめ）の娘であつた。舅の死後、病院は祖父の手にわたり、祖父が亡くなってからは、祖父の上のふたりの息子たちが相続した。わたしの父にも、兄たちとともに病院を相続する権利はあつた。しかし医者ではなかつたし、バーゼルをはなれてロシアに住むようになり病院のためにひとつしなかつたし、というわけで、相続権を主張しなかつた。

ともかくも、祖父イワノフスキーには、三人の息子がいた。「おじいさんには、息子が三人いました。いちばん上の息子はりこう者、中の息子はまあまあ人なみ、下の息子はまるっきりのばかりでした……」（「エルシヨーフ『せ』（むしの小馬）より」というように、わたしのいちばん上の伯父（おじ）がつぎの伯父よりりこうであつたかどうかは知らない。まずそんなことはなかつたらう。ふたりとも大学で学び、医学博士となつてヨーロッパでも有数の病院の経営者となつたのだから、有能な人たちであつたにちがいない。父もやはりばか息子などでなく、進学の可能性は伯父たちと同様にあつたのに、高等教育を受けなかつた。父は家族のなかでいちばん年下、つまり末息子（すえむすこ）だつた。わたしたちの土地のことばでいうとミジニクル、つまり小指、いちばんのチビちゃんということになる。いちばんかわいい息子というわけだ。

しかも三人兄弟のうちでは父だけが、ドイツ女性らしい繊細さをもちあわせていた祖母に似ていた。

上のふたりは祖父に似て大がらながっしりした男たちだった。ここに写真がある。この白いキャップをかぶった白衣姿のふたりは、まるで肉屋といったところではないか。でもこれで、ヨーロッパじゅうに名の通った腕のたつりっぱな外科医だったのだ。つぎに、父の写真を見てほしい。ブロンドの髪、青い目、優雅で繊細で内気なこの美少年は、祖母の秘蔵っ子だった。祖父のイワノフスキイ教授は実務家肌で、上の息子たちとともに研究や病院や患者たちのことに専念していたが、妻を大切に、末息子である父のこともかわいがっていた。父の名はドイツ風だとヤコブ、ロシア風ではヤコヴ、だから、わたしの父称はヤコヴレビチで、ボリス・ヤコヴレビチ・イワノフスキイがわたしのフルネームということになる。

この秘蔵っ子の末息子をできるだけ手もとからはなすまいとしていた祖母は、よく父を連れてバーゼルの街を散歩した。すると人びとは立ちどまって、こんなに愛らしいまるで天使のような男の子は、どこのうちの坊ちゃんだろう、などとささやきかわすのだった。母親ならだれしものことだろうが、祖母も自分の息子が人びとの注目の的になっているのがうれしかったのだ。

十九歳の父は、ドリアン・グレイ（オスカー・ワイルドの長編『ドリアン・グレイの肖像』の美男の主人公）そっくりだったという。え？ わたしもドリアン・グレイに似ていたかって？ いや、そんなことはない。自分の肖像画をめっちゃめっちゃに切りぎさみ、ひきさいてしまつてからのドリアン・グレイになら似ていたといえないこともないが、わたしは五人兄弟のうちで、わたしと末の弟のサーシャだけが父親似だった。ごらんのとおり、わ

たしの髪はブロード、青い目だし、背丈も父と同じく一メートル七八センチだ。ほかの兄弟は母親似だった。大がらな母に似て一メートル八〇センチをこす、やたらと背の高いこの連中は、骨太で、ジブシーのように黒ぐろとした髪をしていた。

わたしは、何歳ぐらに見えるだろうか？ いやどうも。若く見てくださるのはありがたいが、これでもう、とうに六十はすぎているのだ。自慢話をするわけではないが、事実としていうと、このわたしも若いころはこれでもなかなかの男前のほうだった。まだ若僧の靴職人だったころ、町の最高に粹なご婦人がたが、名指しでわたしに靴を縫ってほしいといってきたものだ。そういうご婦人を相手に、靴のサイズをとったりしていると、よくその足から電流のようなものが伝わってくるがあった。ほんとうなのだ。今ではそれもこれもみな、遠い昔のことになってしまったが。さてまた話を父のことにもどすでしょう。

父が中等学校を終えて大学入学準備にとりかかっていたとき、ロシアに旅行して先祖の地を見てきではどうか、ということになった。この計画がどのようにして生まれたものかは知らない。父が中等教育を修めたところで、大学にはいるまえに、世のなかを見ておくのもよからうということになったらしい。祖父は、自分の生まれ故郷、先祖の墓のある土地をたずねることをながいあいだ夢みてきた。祖母のほうは、最愛の息子に楽しい思いをさせてやりたかったのだらう。彼女の大切なヤコブは、上の兄たちとはまったくちがっていた。兄たちは繊腕な実家家で現実的であったのに、ヤコブは夢想的

でロマンチストだった。祖母は父がそもそも医者にむいているかどうか、疑問に思っていたのだ。しかし、みながみな医者という家がらで医者になるのが当然ということである以上は、外科医でなくとも、せめて内科医でもいいし、あるいはいつそのことフロイドのように精神科医にでもなってくれたら、と願うのだった。

そうと事がきまると、スイスのやり方はよく知らないが、大学にヤコブの入学書類を提出したか、あるいはたんに登録したかして、手続きをすべてすませた。そしてイワノフスキイ教授と、わたしの未来の父であるバーゼル出身の若いブロンドの美青年ヤコブのふたりは、ロシアへ向かった。これは一九〇九年のことだから、今からおよそ七十年まえのことである。

一九〇九年にロシアを横断していく、バーゼル出身の若者の胸中を察してみてほしい。わたしはバーゼルにもスイスにも行ったことはない。だが、戦争中軍隊で二年ちかくドイツにいたことがあり、戦後も占領軍としてとどまっていたので、バーゼルやスイスのようすを、およそのところは思い描くことができる。美しい国、アルプス、レマン湖……。しかし山やまや湖はロシアにもあるのだし、それはアルプスやレマン湖に勝るとも劣らないといえると思う。「美しいブルガリア。されどロシアは何ものにも勝る」と歌われているが、ロシアが世界でいちばん美しい国だなどとは、わたしは決して思っていない。ただそれはロシア人にとってということ、ブルガリア人にはやはりブルガリアがどの国よりも美しいものに感じられることだろう。

けれども、十九歳の夢想的で感受性の鋭い若者がスイスからやってきて、ロシアを一日、二日、三日と汽車で行ったらどのように感じるだろう。車窓からはてしない草原や地平線上の村むらをなめたり、白塗りの粘土壁のウクライナ地方の農家や、南ロシアの太陽がさんさんとふりそいでいるサ克蘭ボ畑、満天の星、教会の円屋根、口ひげをはやしたウクライナの男たちや、色あざやかなネックレスをつけた娘たちを見たら、何を思うだろう……。ここは威儀を正したお上品なバーゼルではないのだ。それに、自分の父がここで、このステップで生まれたということがまた、この若者を感動させずにはおかない。といってもそれはわれわれが故郷に帰るときに味わう、胸がしめつけられるような思いだとか、ほぼ四十年もの時を経てふたたびロシアをおとずれた祖父を襲ったはずの感激とはちがったものだったろう。それでも、印象はたいへん強いものだった。

父自身、あとで語ってくれたところによると、窓から身をはなすこともできなかった、広大なステップやひっそりとした小さな駅、ハネガヤ（スステップの多年草）の草むら、若木の林などから目をそらすこともできなかった、という。スイスから一度も出たことのなかった父は、オーストリアを経由してロシアへやってきたわけだが、オーストリアではスイスとくらべて、とりわけ目新しいものなどなかったろうから。

こうした強い印象をあふれんばかりに受けたこの若者は、自分の父が生まれ、祖父母が住んでいた南ロシアの静かな暑い町の、日射しの強い砂の道を歩いていった。それはステップの町によくある、

かなりゆつたりした通りだった。両側には、青いよろい戸のある木造の家いえや、がっしりした木戸のついた木柵、前庭、ポプラの木立がづらなっていた。そして人影ひとつなく、閑散としていた。

もちろん町の人びとは、今は亡きイワノーフスキイの息子が、故郷の土をふみたい、息子のヤコブにも一族発生の地を見せてやりたい、とやってきたことを知っていた。みなは、それはもう、この親子をひと目見たいものだと思っていた。けれどもわが町の人たちは、慎重ぶかかったので、だれも通りに出てきたりしなかった。野次馬のようにむらがってイワノーフスキイ親子が歩いていくのを見物する、などということもしなかった。カーテンをちよつとずらして、ただ窓ごしにそつとふたりを見ていた。何といつてもこれは大事件だった。先祖の住んでいた町や家を見ようと、わざわざスイスから人がやってきたというのだから。

もっともひとりだけ通りに出てきた人がいた。その人は窓ごしなどでなく、家から出てきて、真正面からスイスの人たちを見つめた。この人がいつたいだれだったのか、きつとおわかりのことと思う。それは、のちにわたしの母となったラヒリ（聖書ではラケル。ロシア語ではラヒリ）だった。

「いったい、どこの王子さまだっているの?」「何だつてあたしが、囚人みたいに窓からこそそを見なくちゃならないの?」と彼女はいつた。そして通りに出て、門の前に立ち、木戸によりかかつて、未来のわたしの祖父と父とを一心に見つめた。

この光景を想像できるだろうか? こざつぱりしたブロンドの美しい若者が、外国製の背広にネク

タイ、流行の編みあげ靴といういでたちでやってくる。彼は娘といえ、あのどこもかしこも整然とした美しい都市バーゼルの、白エプロンをかけたこぎれいなドイツ娘ぐらいしか見たことがない。そして、日に照りつけられて熱くなった重い砂をふみしめて、暑い南ロシアの町を歩いていく。すると、ひざまでの古いワンピース姿の日焼けした少女が、木戸によりかかりながら門の前に立っていたのだ。すらりとした素足、二本の指でだきしめられそうなほそいウエスト、ふさふさしたまっ黒な美しい髪、青くすんだ瞳、まっ白な歯が彼の目にはいった。彼女は青い目を皿のようにみはって、はずかしげもなく、むしろあつかましいほどにこちらを見つめている。

このウクライナの小さな町の大膽な十六歳の少女は、礼儀作法の心得などあろうはずもない靴職人の娘だった。少女にとって、その青年は世にも珍しいものだった。それは、青年が、どんなところか見当もつかないスイスの生まれだから、ということだけではなかった。まるでどこかの貴族の息子のようになりをした、青い目のブロードのユダヤ人の青年など、彼女は見たこともなかったのだ。彼女の知っている若者たちといえ、この町の日焼けしてがっしりしたからだつきの靴職人や革職人、仕立屋、御者、荷役人夫ばかりだった。それが今始めて、こんなに色白で目の青い、身なりもきちんとした、清らかな、この世の人とは思えないほど美しい青年を見たのである。

どういったらいいのだろうか。それは決定的瞬間、運命を決する瞬間で、ひと目ぼれというほかない。この娘は父にとって運命の女性、結ばれるべき女性となったのだ。

こうして父は、ユダヤ人の父祖ヤコブが、ラケルと結ばれたように、一生彼女からはなれることがなかった。

その後、多くの年月がすぎてから、父はこんなふうになっていた。門の前に、ほろびた短い服を着て素足で立っている母を見て、王子さまがシンデレラを好きになったように好きになり、スイスに連れ帰ろうと結婚したのだ、と。母にいわせれば、外国製の背広にチョッキ、のりのきいた白い立ち衿のワイシャツといういでたちの、暑さにぐったりした色白の美男子を見てかわいそうになり、それで結婚してあげたんだ、ということであった。もちろんこれはふたりの冗談である。愛しあっていたからこそ、こんなことをいつていたのだ。

祖父と父がスイスからやってきたころには、イワノーフスキイ家の者は、もう町にひとりも残っていなかった。祖父の父親はとくに亡くなっていたし、祖父のふたりの姉たちも故人になっていた。しかし、亡くなった姉たちの子どもは残っていたし、その子どもたちにもまた子どもがいた。

あの当時、小さな町ではなおのこと、外国からの旅行客はかならず百万長者だとみなされた。そして百万長者ともなれば、たちどころに親類と称する連中があらわれてくる。ただしそれは、かつてシヨロム・アレイヘム（一八五九—一九一六年。ウクライナ出身のユダヤ人作家。「屋根の上のバイオリン弾き」の原作者）が描いたような、人びとが食うや食わずの暮らしをしていたちっぽけなユダヤ人の町での話であって、わたしたちの町に関しては的を得ていない。

